（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	劉　振業
論文題目	マカオのカジノにおけるギャンブルの人類学的研究：ギャンブルの不確実性で紡がれるつながりと身体		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、中国・マカオのカジノ産業に関わる多様な人々の活動と相互行為からなるギャンブルのシステムとネットワークを明らかにするとともに、一国二制度をはじめとする独特な政治・社会・経済状況の下で、生の不確実性の部分的な制御を試みる人々の実践としてのギャンブルの様相を考察することである。

本論文は、９章から構成される。序論では、様々な地域と時代におけるギャンブル実践を対象とした先行研究を整理し、それぞれの問題点を明らかにした上で、中国人のギャンブルにみられる「身体的行為」と「自他の関係性」の重視という特徴について論じる。

第２章では、本論文の調査地であるマカオの概況とゲーミング史について説明する。また、一国二制度の下にあるマカオにおいて発展したカジノ産業について概説する。

第３章と第４章では、中国人ギャンブラーに焦点を当てる。第３章では、様々なカジノゲームにみられるギャンブラーの身体性について検討する。なかでも、中国人ギャンブラーの間で最も人気のあるバカラにおいてみられる、ギャンブラーによる「しぼり」と呼ばれる身体行為を分析する。この分析を通して、「しぼり」という行為は、１）命理信仰を背景として、特殊な能力とされる「命（ミン）」を宿した身体をもってゲームの結果に影響を及ぼすことを企図した実践であること、２）ギャンブラーを取り巻き、応援する観客の間に共同的な参与の感覚を呼び起こす効果をもつことが明らかになった。

第４章では、カジノという空間が参入者に及ぼす影響について分析する。この分析を通して、カジノ空間における物質的・感覚的な諸要素の配置と働きによって、参入者が意識的・無意識的にギャンブルを志向するようになる過程が示された。また、個々のギャンブラーのライフストーリーの分析を通して、世俗的でありながら「神聖な場所」としても認識されているという、カジノ空間のもつ両義性が明らかになった。

第５章では、ディーラーの存在に焦点を当てる。マカオのディーラーには、他地域のカジノにはない特徴が付与されている。すなわち、中国人ギャンブラーにとって、マシンではない生身のディーラーは、トランプのカードに触れることでギャンブルの結果に影響を与える者とみなされている。この検討を通して、マカオのカジノではディーラーに対し、独自の「命」を宿した身体的存在としての役割が期待されていることが明らかになった。

第６章では、ホステスやジャンケット（仲介者）をはじめ、カジノのVIPルームに関わる人々に焦点を当てる。彼らはそれぞれの方法で、異なるギャンブラー層をVIPルームに勧誘することで生計を立てている。本章の検討を通して、大陸出身のギャンブラーを接待し、その保証

人ともなる彼らの実践はカジノの制度を支えるものでありながら、危険と不確実性に満ちていることが示された。

第７章では、ギャンブラーを顧客とする売春婦に焦点を当てる。売春婦は一見するとギャンブル実践と関係のない存在であるように見えるが、マカオにおいて、彼女たちの身体は男性ギャンブラーの「厄」を引き受け、それを祓うものとみなされている。彼女たちのライフストーリーの記述と分析を通して、カジノ産業と密接にかかわる女性たちの役割と苦悩、生存戦略が明らかになった。

第８章では、外労（オイロウ）と呼ばれる労働者に焦点を当てる。マカオのカジノでは、数多くの外部からの労働者が働いている。主に東南アジア地域からやってきた労働者たちは、中国人ギャンブラーによって疎外され、ギャンブルに関する交流のネットワークの外部におかれている。一方、中国大陸出身の労働者たちは、中国人ギャンブラーとギャンブルに関するやりとりを行っている。この検討を通して、外労とされる労働者たちの間にある差異と格差が明らかになった。

結論となる第９章では、これまでの議論を整理した上で、本論文の意義を述べる。マカオにおけるカジノの実態について、本論文はそこに参与するさまざまなアクターに着眼した検討を行った。この検討を通して、１）マカオのカジノにおいて、ギャンブルに付随する不確実性はカジノに関わる人々の生の不安定性と重ね合わせられていること、２）彼らの生の不安定性は、一国二制度をはじめとするマカオの特殊な政治経済状況に起因するものであること、３）「命」を宿した身体をもって賭けの結果を制御しようとするギャンブラーたちの実践は、カジノという場所を越えたさまざまなアクター間の身体的なかかわりやネットワークを生み出していることが明らかになった。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本申請論文が対象とするのは、中国・マカオのカジノ産業に関わる人々の実践である。2019年２月から2021年３月にかけて実施した約２年間の現地調査に基づき、申請者は中国人ギャンブラー、ディーラーとホステス、仲介人、売春婦をはじめとする多様な人々の実践が絡まり合いながら、いかにしてマカオのカジノ社会を成り立たせているのかを詳細に明らかにした。ギャンブルを対象とする先行研究には、心理学や精神病理学の知見に基づき、ギャンブラーの行動や思考の「非合理性」を指摘した上で、ギャンブル依存症の予防と治療に向けた提言を行うといった研究が少なくない。これに対して申請者は、カジノに関わる人々の実践を、ギャンブルへの熱狂のみならず、それぞれの抱える生の不安定さとそれを乗り越えようとする試みに着眼して描きだすことで、協働的・共同的な身体実践としてギャンブルを考察するという新たな視座を提起した。本論文はまた、そうした各人の立場や困難を、一国二制度をはじめとするマカオの政治・社会・経済状況との関係から分析しているという点で、これまでのギャンブル研究にはない重層性と説得力を持ち得ていると評価できる。

申請者の着眼する、マカオのギャンブルにおける独特な身体行為の代表例は、「しぼり」と呼ばれる行為である。カジノのバカラテーブルにおいて、中国人ギャンブラーはカードに手で触れて擦ることでカードの点数を制御しようとする。この「しぼり」の行為は、自身の良い「命」を一種の能力と見なすという命理信仰に基づいている。命は身体に宿るとされているため、中国人ギャンブラーは「しぼり」の行為を通して、ギャンブルの不確実性を制御しようとするのである。また、「しぼり」はそれを行う他者に熱狂する観客の声援を通して、テーブルの周囲に一過的な共同性を生み出す。先行研究では瑣末な行為とされてきた「しぼり」について、申請者が緻密な参与観察と聞き取りを通して、命理信仰と結びついた行為の意味と具体的な効果を明らかにしたことは大きな意義をもつ。

申請者によれば、このように身体性を重視する思考と実践は中国人ギャンブラーの行動として完結しているわけではなく、ディーラーやホステスをはじめ、カジノに関わる他の人々もまた、それぞれの身体や、カジノの空間に存在するモノを結節点とする協働的・共同的な関係性の網の中に組み込まれている。

たとえば第５章で検討されるように、中国人ギャンブラーの多くは、ギャンブルに際して機械によるプログラミングを信用せず、デジタルゲームを避ける傾向にある。このとき、生身のディーラーが進行を担うテーブルゲームにおいて、ディーラーの身体はギャンブルの公正性を担保する意味を持つ。さらに、ディーラーはカードに触れることでギャンブルの結果に影響を与えるとされる。

また、第７章で検討されるように、マカオのカジノの周辺にはギャンブラーを

顧客とする売春婦たちが活動している。申請者は彼女たちにもインタビューを行い、ギャンブル実践における売春婦の独特な位置付けを明らかにした。すなわち、陰陽説と命理信仰のもとで、売春婦の身体はその弱い「命」ゆえに、顧客の厄を引き受けるものとされている。ギャンブラーである客にとって、彼女たちの身体は性的快楽の対象とみなされるにとどまらず、「命の厄」、すなわちギャンブルの不運を取り去る「厄祓いの容器」としての意味を負っている。

このように、参与者同士の身体的関わりに着眼しつつ具体的な事例や語りを詳細に分析することで、「命」の宿る身体的存在として直接的・間接的に賭けに参与するディーラーや売春婦の独特な役割を明らかにしたことは、申請者の着眼点の独自性と高い分析能力を表すものと評価できる。

さて、カジノ空間の内外における様々な人々の関わり合いを描きだす申請者の記述が浮かび上がらせるのは、カジノに関わる行為者間の不均衡な権力関係であり、その背景としての一国二制度のはらむ問題である。マカオを特別行政区とする一国二制度の下で当地のカジノ産業は発展した一方で、大陸からの観光客には持ち込み可能な現金の上限設定をはじめ、様々な制限が課されている。このような「二制度」の間を仲介する存在が、第６章で検討される仲介人（ジャンケット）である。彼らは富裕層の客をカジノに誘致し、客の世話を請け負うとともに保証人としての役割も果たすが、その役割には大きなリスクが伴う。

以上のように、申請者はギャンブラー、ディーラー、売春婦、ジャンケットをはじめとする多種多様な人々の複雑な関わりを、その背景にある法制度との関係を含めて明らかにしている。のみならず、接触が極めて難しいと思われる売春婦や移民労働者にもインタビューを行い、彼らの生活の細部を臨場感あふれる生活誌として描いている。本論文の各章で示されたデータの緻密さ、ギャンブル実践を身体性と共同性から捉え直すという視座の独自性、カジノのシステムと個々人の実践の絡まり合いを具体的事例から示した分析の鋭さは高い評価に値する。今後さらに、リスクと不確実性の問題や身体論を扱った先行研究を視野に入れて理論的な考察を深め、人類学的議論に貢献することが期待される。

以上から、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和４年１２月１２日、論文内容と関連事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日 以降